

小樽市教育研究所報

# 環流



第178号 令和3年9月30日

<目次>

児童の活動：朝里中学校……………P1  
 巻頭言：森 万喜子校長……………P1  
 ICT 支援員の活動……………P2  
 ふるさと教育研修講座……………P3  
 北海道教育研究所連盟夏季研修会より…P3  
 教育研究所情報：  
 教育相談、SSW関係……………P4



【1年生総合的な学習の時間】 ↑  
 地域の方による「小樽の歴史」に係る授業

【学校運営協議会】 ↓  
 三鷹市のマイスターとの意見交流(ZOOM)



## 社会とつながる学校をめざして

小樽市立朝里中学校長 森 万喜子



朝里中学校は全校生徒数260名、特別支援学級4学級を含む13学級規模の中学校である。前例踏襲に陥らず、生徒の今と未来を考え、上位目標の実現に向け、進化する学校をめざしている。

令和2年度からスタートしたコミュニティ・スクールも、学校運営協議会を毎月実施し、コロナ禍において地域の子供たちに何ができるかを考え熟議を重ねている。昨年11月に実施した「リユースプラザあさり」では、卒業生から無償で譲り受けた学用品や部活用品、参考書等の譲渡会を開催し、今年度からグラウンド等の学校施設や学校図書館を地域の方々に使っていただく試みを始めた。

「学校は社会の縮図」と言われるが、学校でだけ通用させているルールについても、それが本当に適切で正しいのか、という視点からの見直しとアップデートが必要である。生徒が主体的に考え、大人と対話して実現した校則改正、SDGsをテーマに探究を行う総合的な学習の時間等、「コロナ禍だからできない」と諦めずに「コロナ禍でもできることを」と行動する本校職員、支えてくださる保護者・地域の方に感謝している。

## 「ICT支援員」の活動について



今年度新たに教育研究所に「ICT 支援」が配属されて半年が経とうとしています。GIGA スクール構想に基づき、各小中学校では「1人1台端末」と「高速大容量の通信ネットワーク」が整備され、その効果的な活用について模索が続いているところだと思います。合わせて、これまで進められてきている「情報モラル」にかかわる子供たちへの指導と教職員の研修の充実が求められています。

つきましては、これまでの ICT 支援員の活動について紹介しますので、各学校において参考にするなどして一層効果的に活用いただきますようお願いいたします。

この1学期を通して、ICT支援で28校30回の巡回と2度のICT研修を行い、Chromebook 導入に関わる実情をお聞きし、助言などをさせていただきました。(各学校からの電話相談も随時受けています。)情報モラル教室を小中高大学9校20回実施し、ネット・スマホ・ゲームなどを安全に使いこなすためにどうすればよいのか児童生徒に考えてもらい、生活指導委員会の情報モラル研修会では、ゲーム・スマホやネットのトラブルの実例と、その対応と指導について講演を行いました。また、ICT情報誌(ちょこっとくろ一む)を発行してChromebookの便利な機能などを紹介しております。

一人で29校を担当するというところでなかなかこまめに回ることはできませんが、遠慮なくお声をかけていただきたいと思います。なお、2学期から改めて全校巡回を行う予定です。

### 1 Chromebook 及び Google Workspace for Education を活用した授業について

新学習指導要領では、「情報活用能力」を、言語能力と同様に「学習の基盤となる資質・能力」と位置付けています。各学校では授業でICT機器が利用されているところですが、Chromebook 及び Google Workspace for Education を活用すると「検索」「協働」「連携」が可能です。授業の中で「検索」やグループワークが行われていると思います。Google Workspace for Education アプリ同士を「連携」させながら学級活動も含めた中での活用もあります。Google サイトを使い学級カレンダー、学級日誌、授業の板書写真、個人やグループ発表、作品集、学級の話し合い等を一つのサイトにまとめ、各アプリへリンクさせることで総合サイトとして構築することができますし、子供たち自身で運営することも可能です。



巡回する中で「もっと子どもたちの Chromebook の活用に制限をかけるべき」とのご意見をいただくこともありますが、子供たちの Chromebook の活用についてあまりにも抑制的過ぎれば、自分のスマホやゲーム機などで自由に使いだすこととなります。これからのネット社会においては、何が起こるかわかりません。すべてのトラブルやリスクを想定することは難しいし、排除することはできません。だからこそ、ある程度のリスクは受け入れながら許容できる失敗を繰り返してリスクマネジメント(リスクと価値を天秤にかけながら未然防止や被害の最小化に努めること)を学ばせる必要があると考えます。

### 2 情報モラルについて

「情報活用能力」の中には「情報モラル」が含まれています。現在実施している情報モラル教室では、「フィルターバブル」「ECHO CHAMBER」「確証バイアス」など情報に関わる用語とその陥りやすいトラブルについてネット上の「デマ」や「いじめ」に発展するケースなど実際に起きた事例を基に話しをしています。また、「クリティカルシンキング(批判的思考)」についてこれからの社会で生きる上で必要となる思考であることを特に説明しています。物事を多面的、客観的に捉え、論理性をもって思考する必要性と自分だけの常識や正義感を疑う姿勢や、そして噂やデマに流されないで「本当に正しいのか」という問いかけができるようにする必要がありますし、日常の問題解決の際の思考プロセス「ロジカルシンキング(論理的思考)」とともに様々な場面を通して子供たちにトレーニングしていく必要があると思います。

# 「ふるさと教育研修講座」

## ～「教材『小樽の歴史』」の効果的な活用について～

日程：6月28日(月)～  
7月31日(土)  
形態：オンデマンド  
講師：小樽市総合博物館学芸員  
菅原慶郎氏

教材「小樽の歴史」の効果的な活用に向けて「ふるさと教育研修講座」が実施されました。今回は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点からオンデマンドで開催し、約1か月間の配信期間において51名の先生方に視聴していただきました。配信の内容としては、教材「小樽の歴史」にかかわって、第一章では、8000万年前から小樽の地に人類が住み続けているという史実を基に、時代による生活様式の変化について現在と比較しながら考えていくような学習が大切であるというお話がありました。また、第二章では、大昔の暮らし、アイヌ文化、ニシン漁、北前船、鉄道と小樽、港、運河保存運動の七つのテーマについて、キーワードを用いながらわかりやすく説明がなされるとともに、参考文献やそのテーマにあったおすすめ地域が紹介されるなど、配信された53分間があっという間に過ぎました。



参加者からは、「小樽の歴史という、北海道の開拓や日本の近代化の下支えなど近代史以降の取組に関心が集まる中、今年度世界遺産に登録が決定した北海道・北東北の縄文遺跡群や民族共生象徴空間ウポポイと関連が深いアイヌ文化のつながりにも言及されており、多様な視点から小樽の歴史について考えるきっかけとなった。」「小樽の地区ごとの歴史や特性がとても分かりやすく説明されており、これからの小樽の街づくりを担う子供たちを育てる上でとても参考になった。ふるさと小樽から日本へ、そして世界へとつながるよう教育実践を行っていきたい。」などの意見が寄せられました。

各学校においては、創意工夫ある活用を期待しています。

### 令和3年度 北海道教育研究所連盟夏季研修会から

令和3年7月30日(金)に実施された標記の件について、本研究所から太田研究員(奥沢小)と平口山研究員(手宮中央小)が参加しましたので概要について紹介します。

#### ○ 主体的に学習に取り組む態度の指導と評価の在り方

##### 【子どもが主語になる授業】

- ・ これまでは教師側の視点で、「個に応じた」授業をつくってきた。  
⇒ これからは学習者の視点に立った「個別最適な学び」を実現していくことが大切になる。

##### 【主体的に学習に取り組む態度の評価】

- ・ 「関心・意欲・態度」との違いは…  
「関心・意欲・態度」～挙手の回数やノートなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉え、数値化した評価という誤解が払拭しきれていない。

##### 「主体的に学習に取り組む態度」

- ～①粘り強く取り組もうとするとする側面(エネルギー)
- ②自らの学習を調整しようとする側面(スキル)

他の観点(知・技)(思・判・表)と関連付けて

自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなどの意図的な側面のこと

②を重視→どれだけエネルギーをもって課題に向かっても、スキルがなければエネルギー切れになる

- ・ 「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法…  
〔記述・発言・行動観察・自己評価や相互評価等の状況〕  
〔子どもと教師による評価方針の共有〕
- ・ 評価の方針を児童生徒に示す理由…  
〔妥当性・信頼性を高める〕〔身に付けるべき資質・能力の具体的なイメージを持たせる〕  
〔学習の見通しを持たせ自己の学習の調整を図るきっかけとなる〕

#### ○ 1人1台端末を活用した主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

- ・ ICTを活用する目的は、授業のねらいを達成するためのもの⇒目的を明確にすることが大切  
活用にあたっては、「5W1H」(いつ・どこで・誰が・何を・なぜ・どのように)に合わせて考えてみるとよい
- ・ ICTによってできること⇒児童生徒同士の対話・1人1人の学習状況の把握・グループでの協働作業等

※上記のほか、「主体的に学習に取り組む態度の単元ルーブリックの作成」などがありました。

# 教育研究所情報

## 教育相談の状況と改善に向けて

### 1 教育相談の状況について（教育研究所関係分）

8月31日現在，教育研究所に寄せられた相談は合計26件28回（電話26回，メール1回，来所1回）ありました。昨年度は，4～5月の新型コロナウイルス感染拡大防止による学校の休業の影響もあり，同期の相談件数は，9件12回（電話10回，メール2回）でした。

相談の内容としては，担任の指導や言動が子供や保護者の理解を得られず，子供の心を傷つけたり保護者からの信頼を損ねたりしてしまう事例や，様々な理由による不登校などが多く見られました。

### 2 教育相談からみる学校改善

相談のほとんどは解消されていますが，特に子供や保護者の心情を理解し迅速に対応した学校は，速やかに信頼を取り戻し，良好な関係を構築しています。各学校においては，日頃から丁寧な指導と説明を心掛け，子供や保護者に教育活動の目的や意図について理解を図りながら取組を進めていくことが大切です。

## <気軽に相談・来所を・・・>

Chromebookの効果的な活用について知りたい

子供のよさを伸ばしたい



思いやりとまとまりのある学級をつくりたい

わかる授業，楽しい授業をつくりたい

子供や保護者と良好な関係を築きたい

教育研究所では，教職員の方々の相談にも応じています。上記相談内容のほか，「校内研究の進め方」「子供の琴線に触れる生徒指導」「教育課程の編成・実施」など，経験豊富な相談員が様々な相談に応じます。若手からベテランまで，気軽に相談・来所ください。

## スクールソーシャルワーカー（SSW）より

### 『ヤングケアラー』とは？

『ヤングケアラー』とは，子供の年齢や成長の度合いに見合わない家事や家族の世話などを日常的に行っている子供のことを指します。

- 例えば，①家族に代わり，買い物・調理・掃除・洗濯などの家事をしている。  
②家族に代わり，幼いきょうだいの世話をしている。  
③障害や病気のある家族の世話や見守りをしている。等々

家族のケアを担う子供たちの多くは，家族のケアについて積極的に語ることはありませんが，家族構成を聞いただけでも「もしかして…」と気づくこともあれば，大人びて落ち着いているのに忘れ物が多かったり，家庭生活に関する質問にポイントがずれた返事をしたりするなど，発達面のアンバランスさを感じられることがあります。

学校は，ヤングケアラーと考えられる児童生徒の実態を把握することが重要です。

